



日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

CFO 15654 US/jn  
09/1922.647

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日

Date of Application:

2000年 8月 8日

出願番号

Application Number:

特願2000-239753

出願人

Applicant(s):

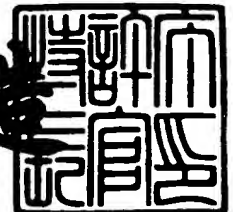
キヤノン株式会社

CERTIFIED COPY OF  
PRIORITY DOCUMENT

2001年 8月24日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

及川耕造



出証番号 出証特2001-3075805

【書類名】 特許願

【整理番号】 4260017

【提出日】 平成12年 8月 8日

【あて先】 特許庁長官 及川 耕造 殿

【国際特許分類】 H04N 1/46

【発明の名称】 画像処理方法、装置および記録媒体

【請求項の数】 6

【発明者】

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号キャノン株式会社  
内

【氏名】 高橋 弘行

【特許出願人】

【識別番号】 000001007

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号

【氏名又は名称】 キャノン株式会社

【代表者】 御手洗 富士夫

【電話番号】 03-3758-2111

【代理人】

【識別番号】 100090538

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号キャノン株式会社  
内

【弁理士】

【氏名又は名称】 西山 恵三

【電話番号】 03-3758-2111

【選任した代理人】

【識別番号】 100096965

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号キャノン株式会  
社内

【弁理士】

【氏名又は名称】 内尾 裕一

【電話番号】 03-3758-2111

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 011224

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9908388

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 画像処理方法、装置および記録媒体

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 入力されたジョブを複数のカラー画像出力装置で並列処理するための画像処理方法であって、

入力画像情報を第 1 のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに展開する展開工程と、

前記第 1 のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを第 2 のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに変換する変換工程とを有し、

前記展開工程で展開された前記第 1 のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第 1 のカラー画像出力装置に転送し、前記変換工程で変換された前記第 2 のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第 2 のカラー画像出力装置に転送することを特徴とする画像処理方法。

【請求項 2】 前記複数のカラー画像出力装置は同機種であり、前記展開工程は該複数のカラー画像出力装置の機種に応じたプロファイルを用いたカラーマッチング処理を行い、

前記変換工程は、前記第 1 のカラー画像出力装置の階調特性および前記第 2 のカラー画像出力装置用の階調特性に応じた変換を行うことを特徴とする請求項 1 記載の画像処理方法。

【請求項 3】 前記第 1 のカラー画像出力装置の階調特性は、キャリブレーション処理により較正されることを特徴とする請求項 2 記載の画像処理方法。

【請求項 4】 前記展開工程は、前記第 1 のカラー画像出力装置に応じた色調整処理および該第 1 のカラー画像出力装置に応じた階調補正処理を行うことを特徴とする請求項 1 記載の画像処理方法。

【請求項 5】 入力されたジョブを複数のカラー画像出力装置で並列処理するための画像処理装置であって、

入力画像情報を第 1 のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに展開する展開手段と、

前記第 1 のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを第 2 のカラー画

像出力装置用のビットマップ画像データに変換する変換手段と、

前記展開工程で展開された前記第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第1のカラー画像出力装置に転送し、前記変換工程で変換された前記第2のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第2のカラー画像出力装置に転送手段とを有することを特徴とする画像処理装置。

【請求項6】 入力されたジョブを複数のカラー画像出力装置で並列処理するための画像処理方法を実現するためのプログラムを記録する記録媒体であって、

入力画像情報を第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに展開する展開機能と、

前記第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを第2のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに変換する変換機能と、前記展開工程で展開された前記第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第1のカラー画像出力装置に転送し、前記変換工程で変換された前記第2のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第2のカラー画像出力装置に転送する転送機能を実現するためのプログラムを記録することを特徴とする記録媒体。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

入力されたジョブを複数のカラー画像出力装置で並列処理するための画像処理を行うための画像処理方法、装置および記録媒体に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

ユーザはそれぞれのコンピュータ上の所望のアプリケーションから、ドライバを用いて所望のプリンタを選択し、LANなどの公衆回線や専用のインターフェイスを経由して、プリントを指示している。また、サーバ、クライアント方式と呼ばれ、クライアントユーザのジョブがドキュメントサーバを経由して、プリンタに送られる方式も広く知られている。

【0003】

また、近年プリント・オン・ディマンドといわれる市場などにおいて、マニュアルや取り扱い説明書など大量ページのドキュメントや、軽印刷業界のような大量部数をプリントするケースが増えており、それを解決するために、サーバまたはクライアント内にある1つのドキュメントを複数台のプリンタに対して一斉にプリントをするというクラスタプリントの考え方が出てきている。更に、ドキュメントのカラー化も進んできたことからカラードキュメントの出力をクラスタプリントを用いて行う要求が出始めている。

## 【0004】

## 【発明が解決しようとする課題】

カラードキュメントのクラスタプリントでは、白黒ドキュメントのクラスタプリントでは問題とならなかった、各プリンタにおける出力サンプルの色味の違いが問題になってきている。すなわち、それぞれのプリンタ自身が持つ環境変動や時間的变化は、それぞれのプリンタにおけるキャリブレーションである程度は緩和されるが、複数台のプリンタ間では少なからずそれぞれ固有の特性を有しており、それらの微妙な差異が出力サンプルに現れる。ユーザにとっては同じドキュメントから作られたものにもかかわらず、一斉に出された出力サンプルの色味が異なることは時として重要な問題になってくる。同機種 of プリンタ間でも色味の差が気になるが、まして異機種間のプリンタ間ではなおさら色味の差が気になる。

## 【0005】

プリンタに応じた色調整は、一般に、RIP処理と呼ばれるPDLデータをビットマップデータに変換する行程の一連の作業に組み込まれている。このため、色合わせだけを取り除くことができない。そのため、複数個のカラーMFPに出力するには、複数回のRIP処理を施さなければならず、そのために2倍のRIP時間を要するという欠点があった。

## 【0006】

本発明は上述の欠点に鑑みてなされたものであり、入力画像情報をビットマップ画像データに展開する処理（RIP処理）の回数を抑制し、高速に複数のカラー画像出力装置で並列処理できるようにすることを目的とする。

## 【0007】

## 【課題を解決するための手段】

本発明は上述の目的を達成するためになされたものであり、入力されたジョブを複数のカラー画像出力装置で並列処理するための画像処理方法であって、入力画像情報を第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに展開する展開工程と、前記第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを第2のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに変換する変換工程とを有し、前記展開工程で展開された前記第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第1のカラー画像出力装置に転送し、前記変換工程で変換された前記第2のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第2のカラー画像出力装置に転送することを特徴とする。

## 【0008】

## 【発明の実施の形態】

## (実施形態1)

## 【システムの概要説明】

図1及び図2は、本実施形態にかかるシステムの構成例を示す概観図である。

図1はパフォーマンスを優先するために、ネットワーク101を2系統に分割している。図1における2系統のネットワークをパブリックネットワーク101a及び、プライベートネットワーク101bと呼ぶこととする。システム構成は図1および図2に限らず他の構成であっても構わない。

## 【0009】

ドキュメントサーバ102には、ハードウェア上2系統のネットワークインターフェイスカード(NIC)を有しており、一方はパブリックネットワーク101a側につながるNIC111、もう一方はプリンタ側に接続するプライベートネットワーク101b側に接続されたNIC112が存在する。

## 【0010】

コンピュータ103a,103b及び103cはドキュメントサーバにジョブを送るクライアントである。図示されていないがクライアントはこれらのほかにも多数接続されている。以下クライアントを代表して103と表記する。

## 【0011】

更にプライベートネットワーク101bにはMFP(Multi Function Peripheral: マルチファンクション周辺機器) 105が接続されている。105はモノクロにてスキャン、プリントまたは、低解像度や2値の簡易的なカラースキャン、カラープリントなどを行うMFPである。また、図示していないがプライベートネットワーク101b上には上記以外のMFPを初め、スキャナ、プリンタあるいは、FAXなどその他の機器も接続されている。

## 【 0 0 1 2 】

MFP104は高解像度、高階調のフルカラーでスキャンまたはプリントが可能なフルカラーMFPである。MFP104は、プライベートネットワーク101bに接続してもよいが、送受するデータ量が膨大となるので、複数ビットを同時に送受できるようにすべく、ドキュメントサーバ102と独自のインターフェイスカード113にて接続されている。

## 【 0 0 1 3 】

本実施形態では少なくとも2台のフルカラーMFP104aと104bを制御することを考えており、専用I/Fカード113を2枚(113aと113b)用意し、フルカラーMFP104aと104bを独立に制御する。

## 【 0 0 1 4 】

ドキュメントサーバ102のハードウェアの構成は、CPUやメモリなどが搭載されたマザーボード110と呼ばれる部分にPCIバスと呼ばれるインターフェイスを介して前述のNIC(Network Interface Card)111,112や、専用I/Fカード113などが接続される。

## 【 0 0 1 5 】

クライアントコンピュータ103上では、DTP(Desk Top Publishing)を実行するアプリケーションソフトウェアによって各種文書/図形が作成/編集される。作成された文書/図形データは、クライアントコンピュータ103上でページ記述言語(Page Description Language)に変換され、ネットワーク101aを経由してMFP104や105に転送されプリントアウトされる。

## 【 0 0 1 6 】

MFP104,105はそれぞれ、ドキュメントサーバ102とネットワーク101bまたは、



専用インターフェイス109(但し、それぞれ109aと109bとする)を介して情報交換できる通信手段を有しており、MFP104,105の情報や状態をドキュメントサーバ102、あるいは、それを經由してクライアントコンピュータ103側に逐次知らせる仕組みとなっている。更に、ドキュメントサーバ102(あるいはクライアント103)は、その情報を受けて動作するユーティリティソフトウェアを持っており、MFP104,105はコンピュータ102(あるいはクライアント103)により管理される。

## 【0017】

## 〔MFP104,105の構成〕

図3～図11を用いてMFP104,105の構成について説明する。但し、MFP104とMFP105の差はフルカラーとモノクロの差であり、色処理以外の部分ではフルカラー機器がモノクロ機器の構成を包含することが多いため、ここではフルカラー機器に絞って説明し、必要に応じて、随時モノクロ機器の説明を加えることとする。

## 【0018】

MFP104,105は、画像読み取りを行うスキャナ部201とその画像データを画像処理するスキャナIP部202、更に、ネットワークを利用して画像データや装置情報をやりとりするNIC(Network Interface Card: ネットワークインターフェイスカード)部分204と、フルカラーMFP104との情報交換を行う専用I/F部205がある。そして、MFP104,105の使い方に応じてコア部206で画像信号を一時保存したり、経路を決定したりする。

## 【0019】

次に、コア部206から出力された画像データは、プリンタIP部207及び、PWM部208を經由して画像形成を行うプリンタ部209に送られる。プリンタ部209でプリントアウトされたシートはフィニッシャ部210へ送り込まれ、シートの仕分け処理やシートの仕上げ処理が行われる。

## 【0020】

## 〔スキャナ部201の構成〕

図4を用いてスキャナ部201の構成を説明する。301は原稿台ガラスであり、読み取られるべき原稿302が置かれる。原稿302は照明ランプ303により照射され、その反射光はミラー304、305、306を経て、レンズ307によりCCD308上に結像され

る。ミラー304、照明ランプ303を含む第1ミラーユニット310は速度 $v$ で移動し、ミラー305、306を含む第2ミラーユニット311は速度 $1/2v$ で移動することにより、原稿302の全面を走査する。第1ミラーユニット310及び第2ミラーユニット311はモータ309により駆動する。

## 【 0 0 2 1 】

## 〔スキャナIP部202の構成〕

図5を用いてスキャナIP部202について説明する。入力された光学的信号は、C CDセンサ308により電気信号に変換される。このCCDセンサ308はRGB3ラインのカラースensaであり、R（レッド）G（グリーン）B（ブルー）それぞれの画像信号としてA/D変換部401に入力される。ここでゲイン調整、オフセット調整をされた後、A/Dコンバータで、各色信号毎に8bitのデジタル画像信号R0,G0,B0に変換される。その後、402のシェーディング補正で色ごとに、基準白色板の読み取り信号を用いた、公知のシェーディング補正が施される。更に、CCDセンサ308の各色ラインセンサは、相互に所定の距離を隔てて配置されているため、ラインディレイ調整回路（ライン補間部）403において、副走査方向の空間的ずれが補正される。

## 【 0 0 2 2 】

次に、入力マスキング部404は、CCDセンサ308のR,G,Bフィルタの分光特性で決まる読取色空間を、NTSCの標準色空間に変換する部分であり、CCDセンサ308の感度特性/照明ランプのスペクトル特性等の諸特性を考慮した装置固有の定数を用いた $3 \times 3$ のマトリックス演算を行い、入力された(R0,G0,B0)信号を標準的な(R,G,B)信号に変換する。

## 【 0 0 2 3 】

更に、輝度/濃度変換部（LOG変換部）405はルックアップテーブル（LUT）RAMにより構成され、RGBの輝度信号をC1（シアン）,M1（マゼンタ）,Y1（イエロー）の濃度信号に変換する。

## 【 0 0 2 4 】

## 〔NIC部204と専用I/F部205の構成〕

NIC部204は、ネットワーク101に対してのインターフェイスの機能を持つのが

、このNIC部204であり、例えば10Base-T/100Base-TXなどのEthernetケーブルなどを利用して外部からの情報を入手したり、外部へ情報を流したりする役割を果たす。

【 0 0 2 5 】

また、専用I/F部205は、フルカラーMFP104とのインターフェイス部分でCMYKそれぞれ多値ビットが平行に送られているインターフェイスであり、4色×8bitの画像データと通信線からなる。もし、Ethernetケーブルを利用して送信すると、MFP104に見合ったスピードで出力できない点と、ネットワークに接続された他のデバイスのパフォーマンスも犠牲になる点からこのような専用の平行インターフェイスを用いている。

【 0 0 2 6 】

【コア部206の構成】

コア部206のバスセクタ部221は、MFP104,105の利用における、いわば交通整理の役割を担っている。すなわち、複写機能、ネットワークスキャン、ネットワークプリント、あるいは、ディスプレイ表示などMFP104,105における各種機能に応じてバスの切り替えを行うところである。

【 0 0 2 7 】

以下に各機能を実行するためのバス切り替えパターンを示す。

【 0 0 2 8 】

- ・複写機能：スキャナ201→コア206→プリンタ209
- ・ネットワークスキャン：スキャナ201→コア206→NIC部204
- ・ネットワークプリント：NIC部204→コア206→プリンタ209

バスセクタ部611を出た画像データは、圧縮部222、ハードディスクドライブドライブ(HDD)などの大容量メモリからなるメモリ部223及び、伸張部224を介してプリンタ部209へ送られる。圧縮部222で用いられる圧縮方式は、JPEG,JBIG,ZIPなど一般的なものを用いればよい。圧縮された画像データは、ジョブ毎に管理され、ファイル名、作成者、作成日時、ファイルサイズなどの付加データと一緒に格納される。

【 0 0 2 9 】

更に、ジョブの番号とパスワードを設けて、それらも一緒に格納すれば、パーソナルボックス機能をサポートすることができる。これは、データの一時保存や特定の人にしかプリントアウト(HDDからの読み出し)ができない様にするための機能である。記憶されているジョブのプリントアウトの指示が行われた場合には、パスワードによる認証を行った後にメモリ部223より呼び出し、画像伸張を行ってラスタイメージに戻してプリンタ部207に送られる。

## 【 0 0 3 0 】

## 〔プリンタIP部207の構成〕

図6を使ってプリンタIP部を説明する。

## 【 0 0 3 1 】

501は出力マスキング/UCR回路部であり、マトリクス演算を用いてM1,C1,Y1信号を画像形成装置のトナー色であるY(イエロー),M(マゼンタ),C(シアン),K(ブラック)信号に変換する部分であり、トナーの分光分布特性に基づいた補正を行う。

## 【 0 0 3 2 】

ガンマ補正部502は、ルックアップテーブル(LUT)RAMを用いて、トナーの階調特性などの色味諸特性を考慮した補正を行う。空間フィルタ503は、シャープネスまたはスムージングを行い、画像信号はPWM部208にデータを出力する。

## 【 0 0 3 3 】

## 〔PWM部208の構成〕

図7を使ってPWM部208を説明する。プリンタIP部207を出たイエロー(Y)、マゼンタ(M)、シアン(C)、ブラック(K)の4色に色分解された画像データ(MFP105の場合は、単色となる)はそれぞれのPWM部208を通してそれぞれ画像形成される。801は三角波発生部、802は入力されるデジタル画像信号をアナログ信号に変換するD/Aコンバータ(D/A変換部)である。三角波発生部801からの信号(図8-1)及びD/Aコンバータ802からの信号(図8-2)は、コンパレータ803で大小比較されて、図8-3のような信号となってレーザ駆動部804に送られ、CMYKそれぞれが、CMYKそれぞれのレーザ805でレーザビームに変換される。

## 【 0 0 3 4 】

そして、ポリゴンスキャナ913で、それぞれのレーザビームを走査して、それぞれの感光ドラム917,921,925,929に照射される。

#### 【 0 0 3 5 】

〔プリンタ部209の構成(カラーMFP104の場合)〕

図9に、カラープリンタ部の概観図を示す。913は、ポリゴンミラーであり、4つの半導体レーザ805より発光された4本のレーザ光を受ける。その内の1本はミラー914、915、916をへて感光ドラム917を走査し、次の1本はミラー918、919、920をへて感光ドラム921を走査し、次の1本はミラー922、923、924をへて感光ドラム925を走査し、次の1本はミラー926、927、928をへて感光ドラム929を走査する。

#### 【 0 0 3 6 】

一方、930はイエロー(Y)のトナーを供給する現像器であり、レーザ光に従い、感光ドラム917上にイエローのトナー像を形成し、931はマゼンタ(M)のトナーを供給する現像器であり、レーザ光に従い、感光ドラム921上にマゼンタのトナー像を形成し、932はシアン(C)のトナーを供給する現像器であり、レーザ光に従い、感光ドラム925上にシアンのトナー像を形成し、933はブラック(K)のトナーを供給する現像器であり、レーザ光に従い、感光ドラム929上にマゼンタのトナー像を形成する。以上4色(Y,M,C,K)のトナー像がシートに転写され、フルカラーの出力画像を得ることができる。

#### 【 0 0 3 7 】

シートカセット934、935および、手差しトレイ936のいずれかより給紙されたシートは、レジストローラ937を経て、転写ベルト938上に吸着され、搬送される。給紙のタイミングと同期がとられて、予め感光ドラム917、921、925、929には各色のトナーが現像されており、シートの搬送とともに、トナーがシートに転写される。各色のトナーが転写されたシートは、分離され、搬送ベルト939により搬送され、定着器940によって、トナーがシートに定着される。定着器940を抜けたシートはフラップ950により一旦下方向へ導かれてシートの後端がフラップ950を抜けた後、スイッチバックさせて排出する。これによりフェイスダウン状態で排出され、先頭頁から順にプリントしたときに正しいページ順となる。

## 【 0 0 3 8 】

なお、4つの感光ドラム917、921、925、929は、距離 $d$ において、等間隔に配置されており、搬送ベルト939により、シートは一定速度 $v$ で搬送されており、このタイミング同期がなされて、4つの半導体レーザ805は駆動される。

## 【 0 0 3 9 】

[プリンタ部209の構成(モノクロMFP105の場合)]

図10に、モノクロプリンタ部の概観図を示す。1013は、ポリゴンミラーであり、4つの半導体レーザ805より発光されたレーザ光を受ける。レーザ光はミラー1014、1015、1016をへて感光ドラム1017を走査する。一方、1030は黒色のトナーを供給する現像器であり、レーザ光に従い、感光ドラム1017上にトナー像を形成し、トナー像がシートに転写され、出力画像を得ることができる。

## 【 0 0 4 0 】

シートカセット1034、1035および、手差しトレイ1036のいずれかより給紙されたシートは、レジストローラ1037を経て、転写ベルト1038上に吸着され、搬送される。給紙のタイミングと同期がとられて、予め感光ドラム1017にはトナーが現像されており、シートの搬送とともに、トナーがシートに転写される。トナーが転写されたシートは、分離され、定着器1040によって、トナーがシートに定着される。定着器1040を抜けたシートはフラップ1050により一旦下方向へ導かれてシートの後端がフラップ1050を抜けた後、スイッチバックさせて排出する。これによりフェイスダウン状態で排出され、先頭頁から順にプリントしたときに正しいページ順となる。

## 【 0 0 4 1 】

[フィニッシャ部209の構成]

図11に、フィニッシャ部の概観図を示す。プリンタ部209の定着部940(または、1040)を出たシートは、フィニッシャ部209に入る。フィニッシャ部209には、サンプルトレイ1101及びスタックトレイ1102があり、ジョブの種類や排出されるシートの枚数に応じて切り替えて排出される。

## 【 0 0 4 2 】

ソート方式には2通りあり、複数のピンを有して各ピンに振り分けるピンソー

ト方式と、後述の電子ソート機能とピン(または、トレイ)を奥手前方向にシフトしてジョブ毎に出力シートを振り分けるシフトソート方式によりソーティングを行うことができる。電子ソート機能は、コレートと呼ばれ、前述のコア部で説明した大容量メモリを持っていれば、このバッファメモリを利用して、バッファリングしたページ順と排出順を変更する、いわゆるコレート機能を用いることで電子ソーティングの機能もサポートできる。次にグループ機能は、ソーティングがジョブ毎に振り分けるのに対し、ページ毎に仕分けする機能である。

#### 【0043】

更に、スタックトレイ1102に排出する場合には、シートが排出される前のシートをジョブ毎に蓄えておき、排出する直前にステーブラ1105にてバインドすることも可能である。

#### 【0044】

そのほか、上記2つのトレイに至るまでに、紙をZ字状に折るためのZ折り機1104、ファイル用の2つ(または3つ)の穴開けを行うパンチャ1106があり、ジョブの種類に応じてそれぞれの処理を行う。

#### 【0045】

更に、サドルステッチャ1107は、シートの中央部分を2ヶ所バインドした後に、シートの中央部分をローラに嚙ませることによりシートを半折りし、週刊誌やパンフレットのようなブックレットを作成する処理を行う。サドルステッチャ1107で製本されたシートは、ブックレットトレイ1108に排出される。

#### 【0046】

そのほか、図には記載されていないが、製本のためのグルー(糊付け)によるバインドや、あるいはバインド後にバインド側と反対側の端面を揃えるためのトリム(裁断)などを加えることも可能である。

#### 【0047】

また、インサータ1103はトレイ1110にセットされたシートをプリンタへ通さずにトレイ1101、1102、1108のいずれかに送るためのものである。これによってフィニッシャ209に送り込まれるシートとシートの間にインサータ1103にセットされたシートをインサート(中差し)することができる。インサータ1103のトレイ

1110にはユーザによりフェイスアップの状態でセットされるものとし、ピックアップローラ1111により最上部のシートから順に給送する。従って、インサータ1103からのシートはそのままトレイ1101、1102へ搬送することによりフェイスダウン状態で排出される。サドルステッチャ1107へ送るときには、一度パンチャ1106側へ送り込んだ後スイッチバックさせて送り込むことによりフェースの向きを合わせる。

#### 【 0 0 4 8 】

##### 〔ドキュメントサーバ102の構成〕

図 1 2 を用いてドキュメントサーバ102を説明する。

#### 【 0 0 4 9 】

NIC111から入力されたジョブは、入力デバイス制御部1201よりサーバ内に入り、サーバに様々なクライアントアプリケーションと連結することにおいてその役割を果たす。入力としてはPDLデータとJCL(Job Control Language)データを受け付ける。それはプリンタとサーバに関する状態情報で様々なクライアントに対応し、このモジュールの出力は、適切なPDLとJCLの構成要素すべてを結合する役割を持つ。

#### 【 0 0 5 0 】

入力ジョブ制御部1202はジョブの要求されたリストを管理し、サーバに提出される個々のジョブにアクセスするために、ジョブリストを作成する。更に、このモジュールには、ジョブのルートを決めるジョブルーティングと、ジョブの順序を決めるジョブスケジューリングの機能がある。

#### 【 0 0 5 1 】

ラスタライズ処理(RIP)部1203はPDLをRIP処理して、適切なサイズと解像度のビットマップを作成する。RIP処理部1203は、PostScript(Adobe社の商標登録)をはじめ、PCL、TIFF、JPEG、PDFなど様々なフォーマットのラスタライズ処理が可能である。

#### 【 0 0 5 2 】

データ変換部1204は、RIPによって作り出されるビットマップイメージの圧縮およびフォーマット変換を行う。そして、各プリンタにマッチした最適な画像イ



メージタイプを選び出す。例えば、ジョブをページ単位で扱いたい場合には、TIFFやJPEGなどをRIP部でラスタライズした後のビットマップデータにPDFヘッダを付けて、PDFデータとして編集するなどの処理を行う。

#### 【0053】

出力ジョブ制御部1205は、コマンド設定に基づき、ジョブのページイメージの扱い方を管理する。ページイメージの扱い方としては、例えば、プリンタによる印刷したり、ハードディスクドライブ(HDD)1207にセーブしたりする方法がある。さらに、印刷後のジョブを、ハードディスクドライブ1207にセーブするか否かを選択することも可能であり、セーブされた場合には再呼び出しすることも可能である。さらに、出力ジョブ制御部1205は、ハードディスクドライブ(HDD)1207とRAM1208との相互作用を管理する。

#### 【0054】

出力デバイス制御部1206は、どのデバイスに出力するか、またどのデバイスをクラスタリング(複数台接続して一斉にプリントすること)するかという制御を行う。さらに、出力デバイス制御部1206はデバイス104や105の状態監視と装置状況をドキュメントサーバ102に伝えることも行う。

#### 【0055】

##### [ページ記述言語とRIP部1203の構成]

一般に、ADOBE社のPostScript(登録商標)に代表されるPDL(Page Description Language: ページ記述言語)で記述されたデータを印刷や表示が可能なビットマップデータに展開することをRIP(Raster Image Processor)と呼ぶ。ハードウェアとソフトウェアでこれを実現するものがあり、それぞれハードウェアRIP、ソフトウェアRIPという。

#### 【0056】

図13にRIP部1203の構成を示す。RIP部1203は、PDLデータを印刷や表示に応じた解像度でビットマップデータに変換するラスタライズ部1301と、カラーマネージメントを司るCMS(Color Management System)部1302及び、CMYK各色のリニアリティを保つためのガンマ補正を行うTRC(Tone Reproduction Curve)部1303から構成される。

## 【 0 0 5 7 】

## [ラスライズ部1301]

一般にPDLデータは以下の3要素に分類されており、原稿画像はこれらの要素の組み合わせで構成される。

## 【 0 0 5 8 】

- (a)文字コードによる画像記述
- (b)図形コードによる画像記述
- (c)ラス画像データによる画像記述

図14-1にPDLデータの記述例を示し、図14-2に図14-1のPDLデータを展開した結果を示す。

## 【 0 0 5 9 】

文字情報の記述例を、文字情報R1401を記述した例を用いて説明する。L1411は、文字の色を指定する記述であり、カッコの中は順にC、M、Y、Bの濃度を表わしている。色指定コマンドの最小値は0.0であり、最大値は1.0である。L1411は文字を黒にすることを指定している。L1412は変数String1に文字列"IC"を代入している。L1413における第1、第2パラメータは文字列をレイアウトする用紙上の開始位置座標のx座標とy座標を示し、第3パラメータは文字の大きさを示し、第4パラメータは文字の間隔を示し、第5パラメータはレイアウトすべき文字列を示している。要するにL1413は座標(0.0, 0.0)のところから、大きさ0.3、間隔0.1で文字列"IC"をレイアウトするという指示となる。

## 【 0 0 6 0 】

図形情報の記述例を、図形情報R1402を記述した例を用いて説明する。L1421はL1411と同様、線の色を指定しており、ここでは、シアンが指定されている。L1422は、線を引くことを指定するためのものであり、第1、2パラメータが線の始端座標、第3、4パラメータが終端座標のそれぞれx座標、y座標である。第5パラメータは線の太さを示す。

## 【 0 0 6 1 】

ラス画像情報の記述例を、ラス画像情報R1403を記述した例を用いて説明する。L1431は、ラス画像を変数image1に代入している。ここで、第1パラメー

タはラスタ画像の画像タイプ、及び色成分数を表わし、第2パラメータは1色成分あたりのビット数を表わし、第3、第4パラメータは、ラスタ画像のx方向、y方向の画像サイズを表わす。第5パラメータ以降が、ラスタ画像データである。ラスタ画像データの個数は、1画素を構成する色成分数、及び、x方向、y方向の画像サイズの積となる。L1431では、CMYK画像は4つの色成分(Cyan、Magenta、Yellow、Black)から構成されるため、ラスタ画像データの個数は(4x5x5=)100個となる。L1432は、座標(0.0, 0.5)のところから、0.5x0.5の大きさにimage1をレイアウトすることを示している。

## 【 0 0 6 2 】

図 1 4 - 2 は、1ページの中で上記3つの画像記述を解釈して、ラスタ画像データに展開した様子を示したものである。R1401, R1402, R1403はそれぞれのPDLデータを展開したものである。これらのラスタ画像データは、実際にはCMYK色成分毎にRAM1208(あるいは、ImageDisk1207)に展開されており、例えばR1401の部分は、各CMYKのRAM1208に、C=0、M=0、Y=0、K=255が書かれており、R1402の部分は、それぞれ、C=255、M=0、Y=0、K=0が書き込まれる。

## 【 0 0 6 3 】

ドキュメントサーバ102内では、クライアント103(あるいは、ドキュメントサーバ自身)から送られてきたPDLデータは、PDLデータのままだ、上記のようにラスタ画像に展開された形で、RAM1208(あるいは、ImageDisk1207)に書き込まれ、必要に応じて保存される。

## 【 0 0 6 4 】

## [CMS(Color Management System)部1302]

図 1 3 に示されるCMS部1302は、いわゆるICC (International Color Consortium) Profile と呼ばれる変換テーブルSource Profile (ソースプロファイル) 1304やPrinter Profile (プリンタプロファイル) 1305を自由に選択することにより、カラーマッチングを行う。つまり、ソースプロファイルに記載されている入力画像データが依存する特性に応じた補正条件と、プリンタプロファイルに記載されているプリンタの特性に応じた補正条件とを用いて、入力画像データを処理する。

## 【0065】

PDLデータにはRGB系とCMYK系の2種類のデータがあり、後者はAdobe社のPhotoshop(商標登録)やIllustrator(商標登録)などをはじめとするCMYKでデータを扱うことのできる一部のアプリケーションから作成されたPDL(主にPostScript)データであり、それ以外のアプリケーションから作成されたPDL(主にPostScript)データや、TIFF, JPEGと言ったフォーマットのデータにおいてはRGB系として扱われる。

## 【0066】

一般的にICCプロファイルには、数式列や多次元ルックアップテーブルなどが格納されている。本実施形態では説明を容易にするために、数列式を用いて演算でそれぞれ変換するような方法で説明する。なお、3次元ルックアップテーブルなどの他の形式でも同様に処理することができる。

## 【0067】

RGB系のPDLデータが入力された場合には、ソースプロファイルに格納されている図15のE1501式を用いて一度RGBデータを規格化された $L^*a^*b^*$ 空間に変換する。このソースプロファイル1304には、S-RGBに代表される各種ディスプレイのプロファイルや、デジタルカメラ、スキャナなどの入力装置のプロファイルなどがあり、デバイスの種類に応じた数列式  $\{a00 \cdots a22\}$  が格納されている。

## 【0068】

同様に、CMYK系のデータが入力された場合には、プリンタプロファイルに格納されたE1502式を用いて $L^*a^*b^*$ 空間に変換される。SWOP, Euroscale, JapanColorなどのインクの色再現をシミュレーションする場合は、プリンタの種類だけでなくシミュレートする対象に対応させて数列式  $\{b00 \cdots b23\}$  をソースプロファイルに格納することが必要である。

## 【0069】

次に、 $L^*a^*b^*$ 空間からプリンタにあったCMYKデータに変換する。本実施形態ではMFP104aで印刷するので、E1503式を用いて変換を行う。

## 【0070】

この場合の数列式  $\{c00 \cdots c32\}$  は各種プリンタの機種毎に用意されている。た

たとえば、MFP104aとMFP104bが別のタイプの機種であった場合、E1503はMFP104a用のプロファイルであり、E1504はMFP104b用プロファイルと言った具合である。ターゲット機種が変われば、別のプロファイルを選択することになる。

## 【 0 0 7 1 】

また、プリンタプロファイルでは、Perceptual(色相保存)、Colormetric(色差最小)、Saturation(彩度優先)といったRendering Intentと呼ばれるディスプレイや入力装置と出力デバイスとの再現範囲の違いを調整する方法に応じて数列式を複数個用意しておいて選択することもできる。

## 【 0 0 7 2 】

規格化された色空間に一度変換する理由は、スキャナ、ディスプレイなどの様々な入力環境の色を、種々のプリンタという出力環境の異なるものに出力する場合に常に同等の色味を保証するためである。

## 【 0 0 7 3 】

## [TRC(Tone Reproduction Curve)部1303]

TRC部1303は、CMYK各色8ビット(0~255)で入力される値に対してそれぞれのプリンタの階調特性に応じたガンマ変換を行う。一般に、入力された信号に対して図16-1のようなリニアなテーブルG0によって変換し出力した結果は、リニアな階調特性を有さない。たとえば、図18のようなチャートを出力し、濃度計でその出力濃度を測定すると、図16-2のような出力結果Giとなる。そこで、予めGi(図16-2)の逆関数であるGa(図16-3)のようなガンマテーブルを用いてTRC部で変換することにより、図16-1のようなリニアなプリント出力を得ることができる。

## 【 0 0 7 4 】

GiとGaは互いに逆関数のガンマテーブルであり、 $G_a * G_i = G_0$ であるため、結果としてリニアな出力結果G0を導き出すこととなる。

## 【 0 0 7 5 】

Giに示されるプリンタの階調特性は、温度、湿度などの環境変動や、プリンタ電源立ち上げやプリント開始からの時経変化、トータルプリント枚数、消耗品の摩耗度合いなどの耐久変化などに応じて刻々変化していくため、定期的にこのガ

ンマテーブルを取り替えなければ常にリニアな画像を得ることができない。

#### 【0076】

そのため、キャリブレーション(リニアライゼーション)のためのツールが必要になる。キャリブレーションツールは、まず、プリンタから図18のようなチャートをプリントする行程と、プリントアウトされたチャートサンプルのそれぞれのパッチ濃度を読みとる行程、そして、読み込まれたパッチ濃度の値に応じてTRC部のガンマテーブルを補正するという3つ行程から成り立っている。ここで、パッチ濃度を読みとるためには、前述のスキヤナ部201を利用してもいいし、濃度計を用いても構わない。

#### 【0077】

##### [カラーMFP104の2台接続]

TRC部のガンマテーブルは、前述したように、それぞれのデバイス毎で固有であるため、もし同時に2台のカラーMFPに同じPDLデータに応じた出力画像を一斉に出力しようとしても、それぞれのカラーMFPのリニアリティを保証することができない。

#### 【0078】

そこで、図19のように2回RIP処理を行うことが考えられる。すなわち、入力されたPDLデータを一度ハードディスクドライブ(HDD)1207に格納し、それを2回RIP処理する。その際に、1回目のRIPではMFP104a用のガンマテーブル1701を用いて、MFP104a固有のCMYKデータを作り、MFP104aに出力する。そして、2回目のRIPではMFP104b用のガンマテーブル1702を用いて、MFP104b固有のCMYKデータを作り、MFP104bに出力するのである。

#### 【0079】

RIP処理部1203が1つしかなければ、RIP処理は逐次2回行われる。

#### 【0080】

なお、2つのRIP処理部1203aと1203bを備えているのであれば、2つのRIP処理部を用いて並列処理することにより高速に処理することができる。但し、それぞれのRIPモジュール(1203aと1203b)では、それぞれのガンマテーブル(1701と1702)が使用される。

## 【0081】

各デバイスに対応させて複数回RIP処理を行う方法によれば、それぞれのデバイスに合った色味でプリントアウトすることができるが、複数回RIPを行うが故にRIP時間は複数倍となり、プリントパフォーマンスを犠牲にするという欠点がある。

## 【0082】

そこで、複数台のカラーMFP104を接続して、1回のRIP処理で各デバイス用のデータを作成する方法を提供する。図20に示すように、一方(たとえば、MFP104a)については通常にプリントし、他方(MFP104b)についてはRIP処理の結果に対して補正を行い出力する。即ち、前者(MFP104a)がマスタとなり、後者(MFP104b)がスレブとなる。

## 【0083】

スレブ側用のデータは、マスタ(MFP104a)用のガンマテーブルを用いて処理されたMFP104a用CMYKデータを、MFP104b用に補正するための補正ガンマテーブル部1801で補正することにより得られる。

## 【0084】

MFP104a用のCMYKデータに対して、MFP104a用のガンマテーブルGa(図16-3)の逆関数テーブルGi(図16-2)を掛けることにより、TRC部1403前のCMYKデータを得、そして、MFP104b用のガンマテーブルGb(図17)を掛けることによりMFP104bにマッチしたCMYKデータを得る。

## 【0085】

つまり、補正テーブル部1801に、 $G_s = G_i * G_b$ を計算したガンマテーブルGsを設定すればよい。

## 【0086】

[カラーMFP104が3台以上接続された場合]

3台以上接続された場合には、クラスタプリントする組み合わせは広がる。たとえば、図21のように104a, 104b, 104cという3台のカラーMFPが接続されていた場合、必ずしも実施形態1のようなマスタ、スレブの関係が作れるわけではない。即ち、クラスタの組み合わせは、(104aと104b)、(104bと104c)、(104cと1

04a)及び、(104aと104bと104c)となり、104aをマスタにしても、マスタが入らない組み合わせができてしまうためである。従って、104a, 104b, 104c全てのデバイス用に補正テーブル部を用意しなければならない。

【 0 0 8 7 】

MFP104aが実施形態1でいうマスタに相当する場合には、TRC部1403にはMFP104a用のガンマテーブルGaが入り、MFP104a用のテーブル補正部1901にはリニアなガンマテーブルG0、MFP104b用のテーブル補正部1902にはガンマテーブル( $G_i * G_b$ )、そして、MFP104c用のテーブル補正部1903にはガンマテーブル( $G_i * G_c$  但し $G_c$ はMFP104c用ガンマテーブル)を設定する。

【 0 0 8 8 】

このようにすることで、どの組み合わせでも常に補正されたCMYKデータが1回のRIP処理でそれぞれのカラーMFPに出力することができる。

【 0 0 8 9 】

また、改めてキャリブレーションを行うと、TRC部1403のガンマテーブルGaが更新されるため、再度 $G_i$ も求めなおして、それぞれのテーブル補正部には新たなテーブルが用意されることになる。

【 0 0 9 0 】

本実施形態によれば、RIP処理部の数より多い数のプリンタを用いたクラスタ処理を、出力画像の品質を低下させずに高速に行うことができる。

【 0 0 9 1 】

【異機種間のクラスタプリント】

次に、クラスタの組み合わせのカラーMFP104が異なる種類の機種であった場合について説明する。プリンタプロファイル1405は機種によって異なるため、異機種同士ではTRC部1403のガンマテーブルを変更するだけでは当然色味を合わせることができない。

【 0 0 9 2 】

そこで、ガンマテーブル同様に、プリンタプロファイル1405を補正するプロファイル補正部2001と2002を図22のように追加し、デバイス間の色の差異を補正する。



## 【 0 0 9 3 】

補正に際しては、第 1 に、CMYKそれぞれの色にルックアップテーブル(ガンマテーブル)で近似した値を算出する方法がある。これは、テーブル補正部と同じ方式であるが、この場合には、テーブル補正部のガンマテーブルと掛け合わせて合成されたルックアップテーブルとして 1 つにまとめることも可能である。

## 【 0 0 9 4 】

第 2 に、CMYKデータに数列式を掛けて近似的にデバイスに依存したCMYKを算出する関数演算の方法で求めることもできる。たとえば、図 2 3 のE2003ような行列演算で新たなCMYKデータを作ることにも可能であるし、ルックアップテーブルと行列演算式の双方でも可能である。

## 【 0 0 9 5 】

また、RIP部1203から出力されるCMYKの画像データを一度ハードディスクドライバHDD(1207)で一旦保存し、それぞれの補正テーブルを通して、それぞれMFP104aとMFP104bあるいは、それ以上のデバイスに出力することもできる。

## 【 0 0 9 6 】

同機種を複数台用いた時のクラスタプリントと異機種を複数台用いた時のクラスタプリントを説明したが、どちらの方法を用いるかは、ドキュメントサーバ102が出力するプリンタの種類を識別し、自動的に選択すればよい。なお、マスタのプリンタについては、予め設定されている優先順位またはジョブ指示にユーザによって指示された情報に基づき設定される。

## 【 0 0 9 7 】

本実施形態によれば、1つのサーバ102から少なくとも2台以上のカラーMFP104にクラスタプリントを行う際に、マスタとなるカラーMFPの特性に合わせた色補正を行いマスタ用の出力データを作成し、そしてスレブとなるカラーMFPの出力のためにマスタ用出力データをスレブ用出力データに補正する補正テーブルを用意し、1回のRIP処理にて、色味の合ったそれぞれの画像データを複数台のカラーMFPに同時にクラスタプリントすることができるカラークラスタリングシステムを提供することができる。

## 【 0 0 9 8 】

## (他の実施形態)

また前述した実施形態の機能を実現する様に各種のデバイスを動作させる様に該各種デバイスと接続された装置あるいはシステム内のコンピュータに、前記実施形態機能（例えば、図20～図22で実現される機能）を実現するためのソフトウェアのプログラムコードを供給し、そのシステムあるいは装置のコンピュータ（CPUあるいはMPU）を格納されたプログラムに従って前記各種デバイスを動作させることによって実施したものも本発明の範疇に含まれる。

## 【0099】

またこの場合、前記ソフトウェアのプログラムコード自体が前述した実施形態の機能を実現することになり、そのプログラムコード自体、及びそのプログラムコードをコンピュータに供給するための手段、例えばかかるプログラムコードを格納した記憶媒体は本発明を構成する。

## 【0100】

かかるプログラムコードを格納する記憶媒体としては例えばフロッピーディスク、ハードディスク、光ディスク、光磁気ディスク、CD-ROM、磁気テープ、不揮発性のメモ리카ード、ROM等を用いることが出来る。

## 【0101】

またコンピュータが供給されたプログラムコードを実行することにより、前述の実施形態の機能が実現されるだけでなく、そのプログラムコードがコンピュータにおいて稼働しているOS(オペレーティングシステム)、あるいは他のアプリケーションソフト等と共同して前述の実施形態の機能が実現される場合にもかかるプログラムコードは本発明の実施形態に含まれることは言うまでもない。

## 【0102】

更に供給されたプログラムコードが、コンピュータの機能拡張ボードやコンピュータに接続された機能拡張ユニットに備わるメモリに格納された後そのプログラムコードの指示に基づいてその機能拡張ボードや機能格納ユニットに備わるCPU等が実際の処理の一部または全部を行い、その処理によって前述した実施形態の機能が実現される場合も本発明に含まれることは言うまでもない。

## 【0103】

【発明の効果】

本発明によれば、出力画像の品質を低下させずに、入力画像情報をビットマップ画像データに展開する処理の回数を抑制し高速に複数のカラー画像出力装置で並列処理することができる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

本願の実施形態にかかるシステムの 1 例を示す全体図。

【図 2】

本願の実施形態にかかるシステムの 1 例を示す全体図。

【図 3】

本願の実施形態にかかる画像形成装置全体のブロック図。

【図 4】

本願の実施形態にかかる画像形成装置のスキヤナ部を示す図。

【図 5】

本願の実施形態にかかる画像形成装置のスキヤナ IP 部を示す図。

【図 6】

本願の実施形態にかかる画像形成装置のプリンタ IP 部を示す図。

【図 7】

本願の実施形態にかかる画像形成装置の PWM 部のブロック図。

【図 8】

本願の実施形態にかかる画像形成装置の PWM 部のタイミング図。

【図 9】

本願の実施形態にかかるカラー画像形成装置のプリンタ部を示す図。

【図 1 0】

本願の実施形態にかかる白黒画像形成装置のプリンタ部を示す図。

【図 1 1】

本願の実施形態にかかる画像形成装置のフィニッシャ部を示す図。

【図 1 2】

本願の実施形態にかかる本発明のドキュメントサーバ内部のジョブフロー。

【図 1 3】

本願の実施形態にかかるRIP部の構成を示す図。

【図 1 4】

PDLデータの記述例とそのラスタ展開後を示す図。

【図 1 5】

ソースプロファイルとプリンタプロファイルの数列式。

【図 1 6】

ガンマカーブを示す図。

【図 1 7】

ガンマカーブを示す図。

【図 1 8】

キャリブレーションで用いるチャートの一例を示す図。

【図 1 9】

RIP部の構成を示す図。

【図 2 0】

RIP部の構成を示す図。

【図 2 1】

RIP部の構成を示す図。

【図 2 2】

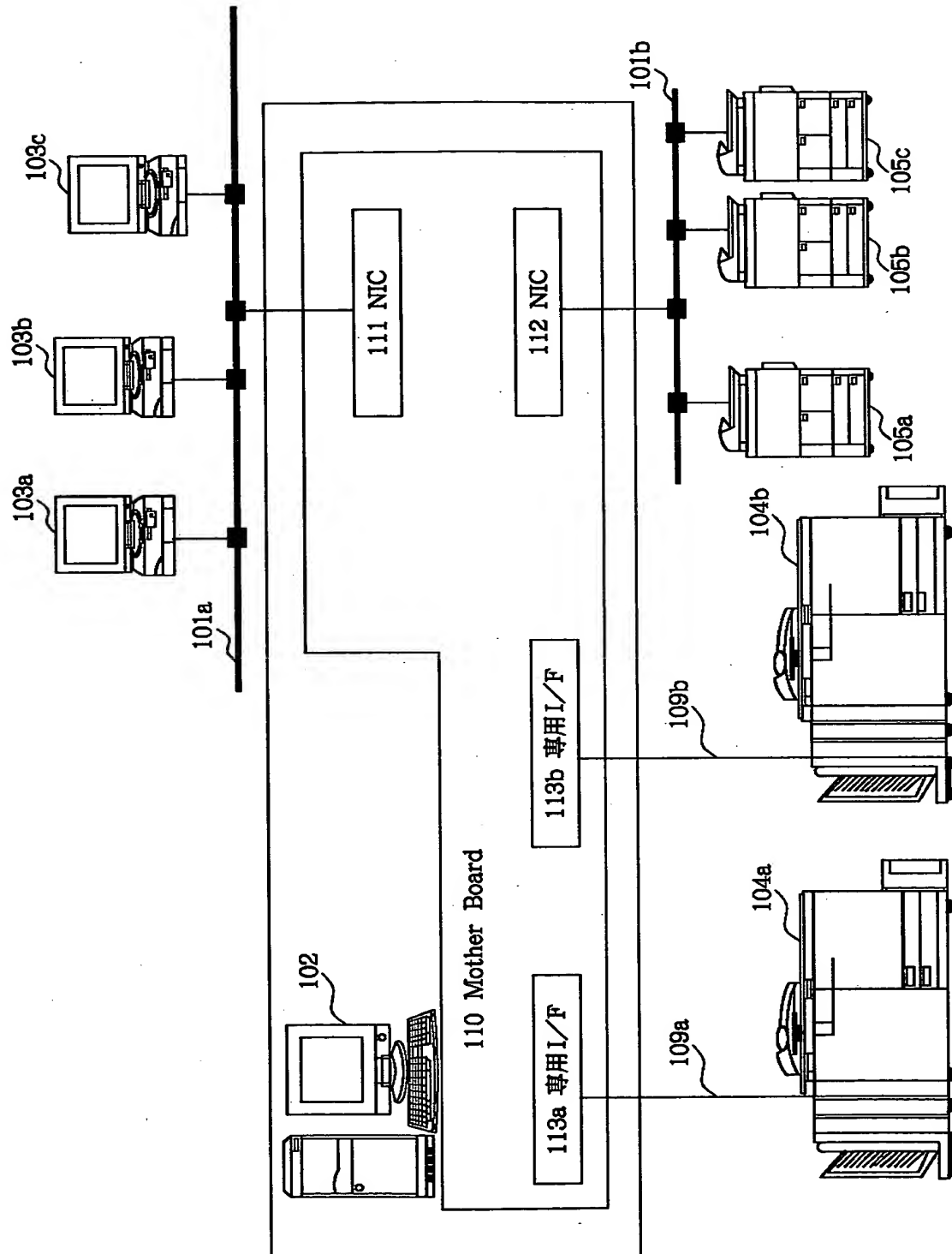
RIP部の構成を示す図。

【図 2 3】

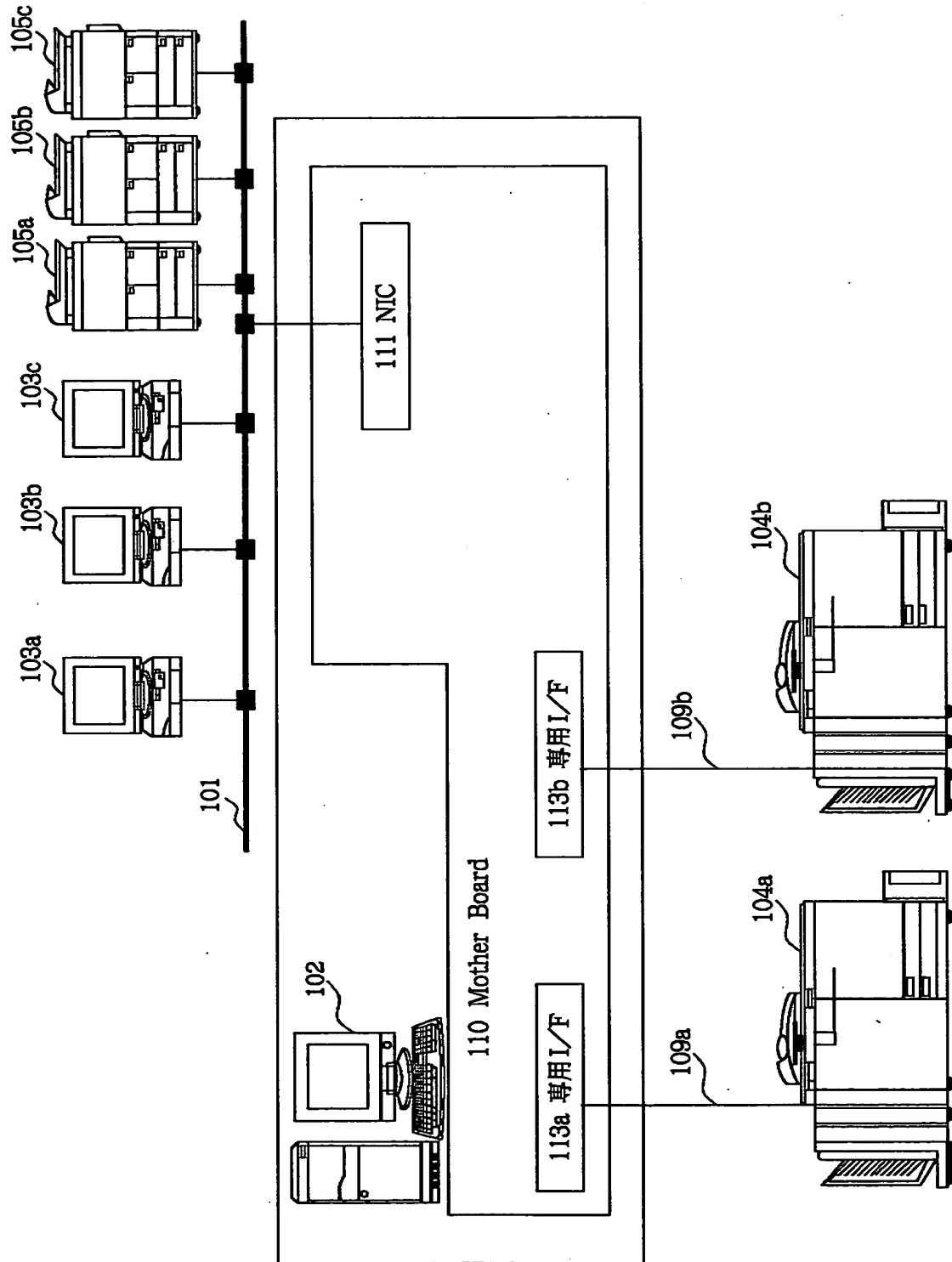
プロファイル補正部の数列式。

【書類名】 図面

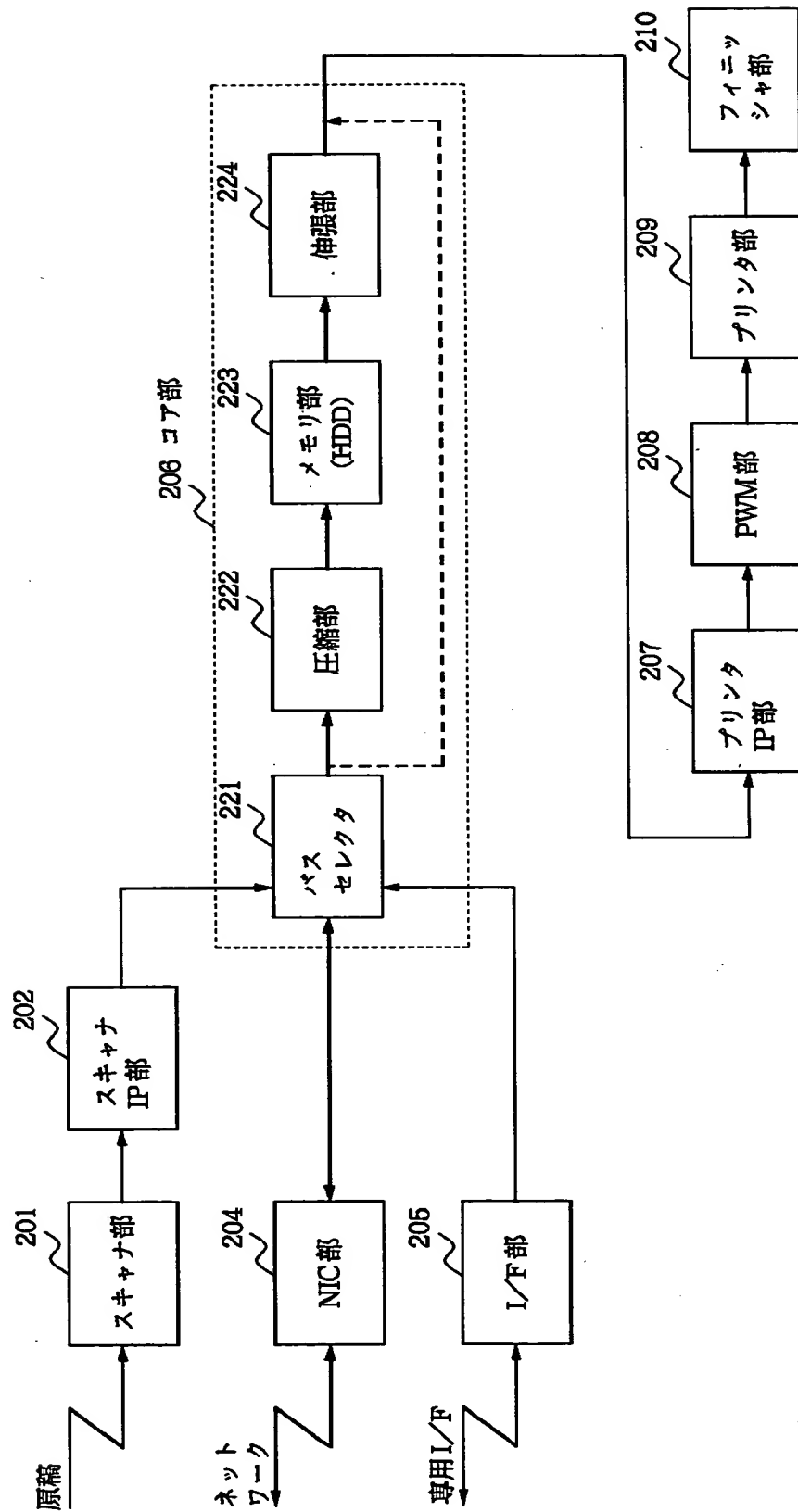
【図 1】



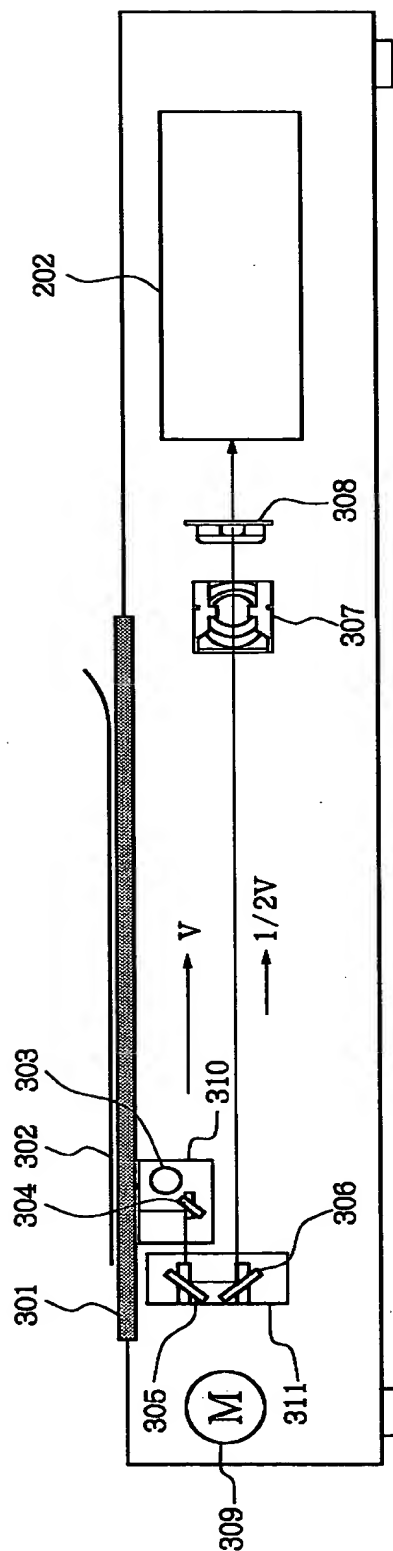
【図 2】



【図 3】

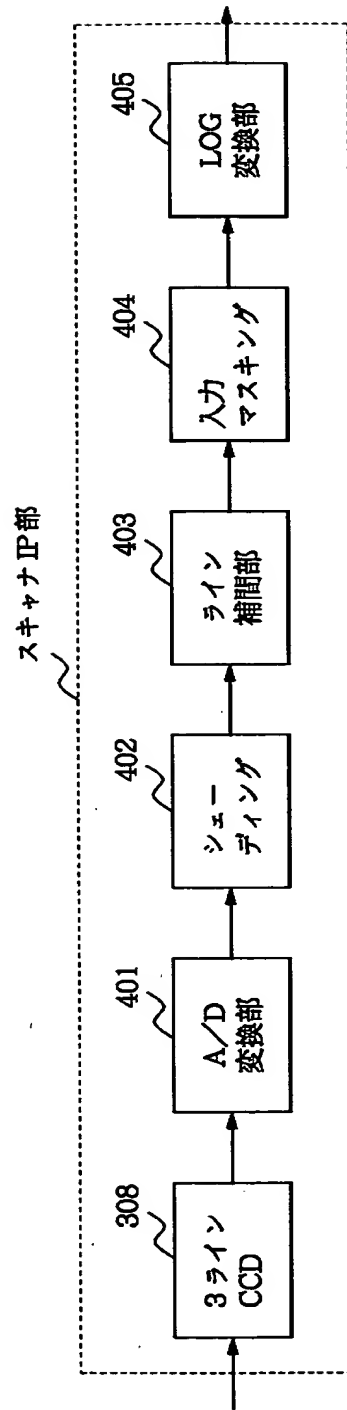


【図4】

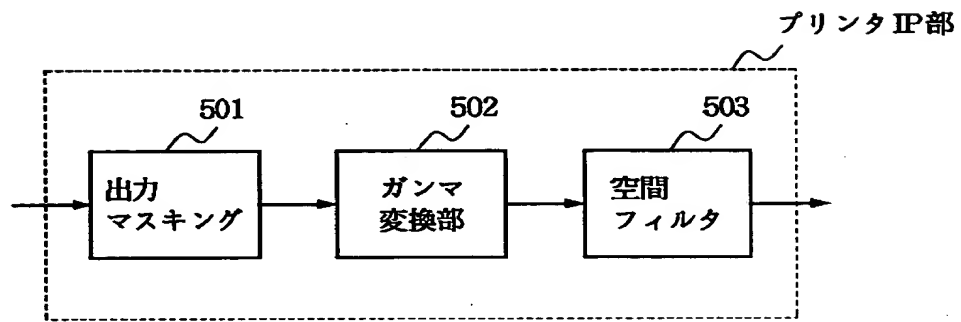




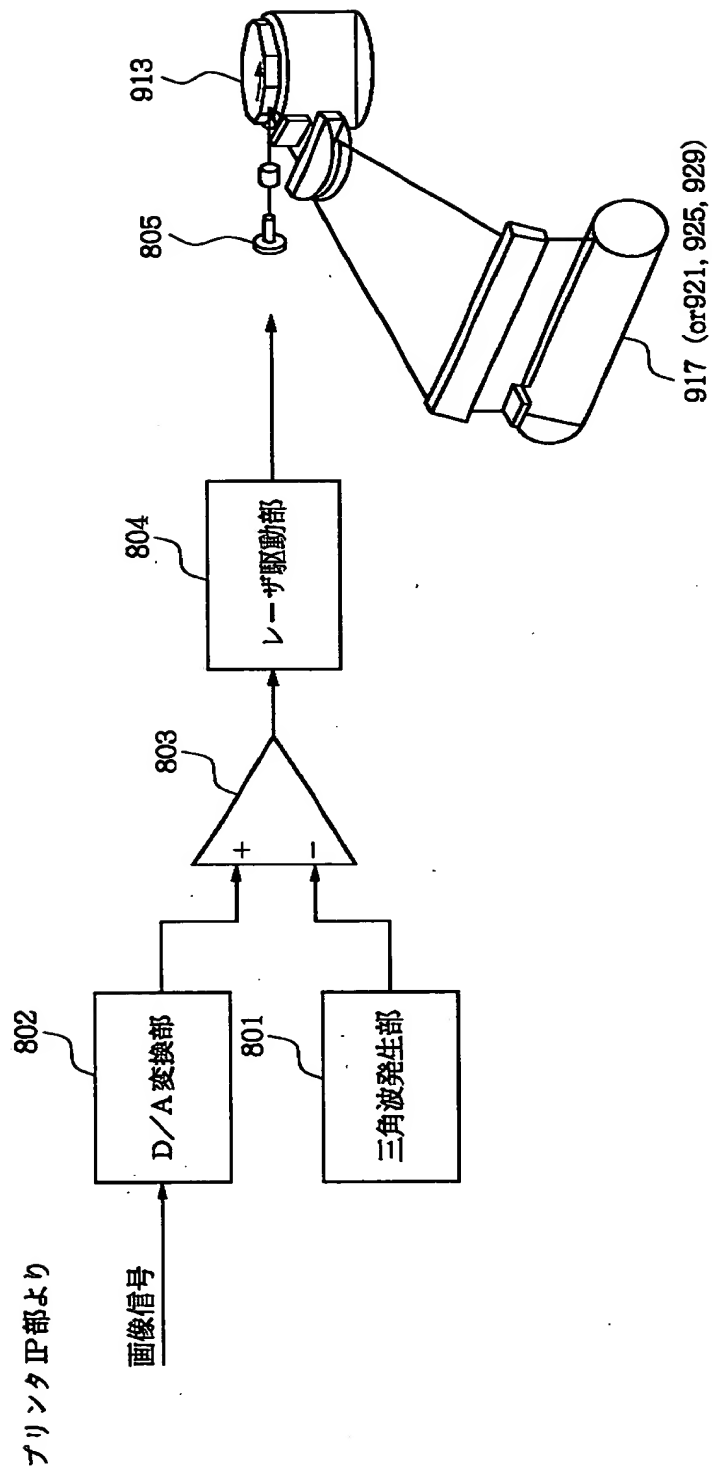
【図5】



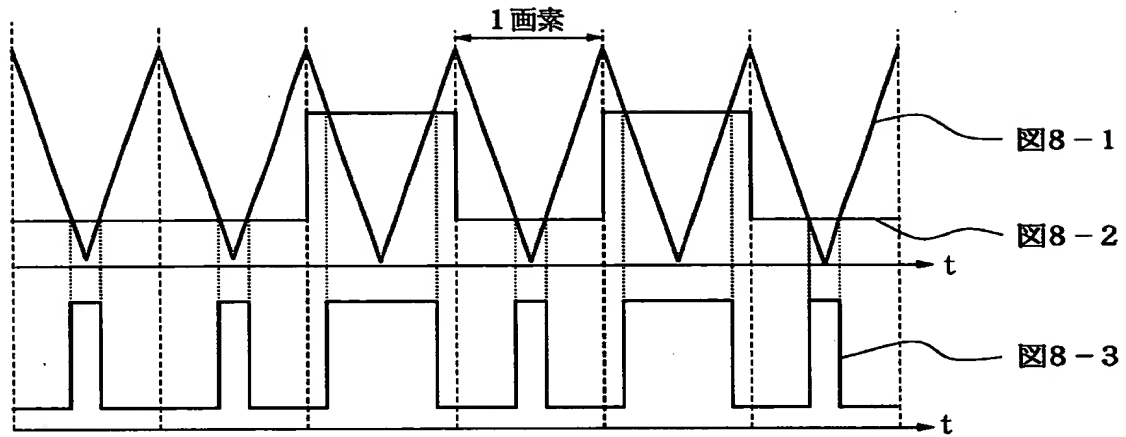
【図6】



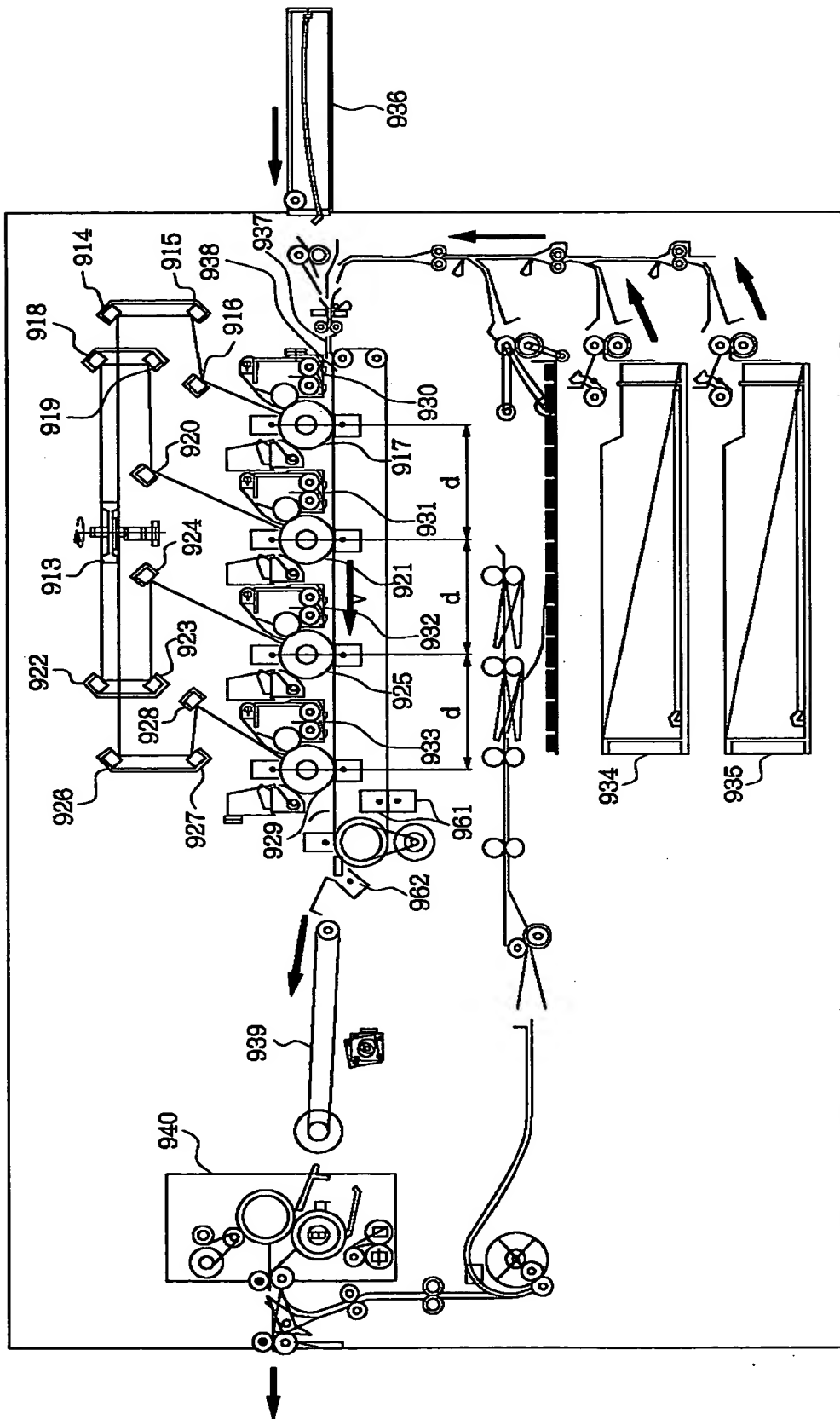
【図 7】



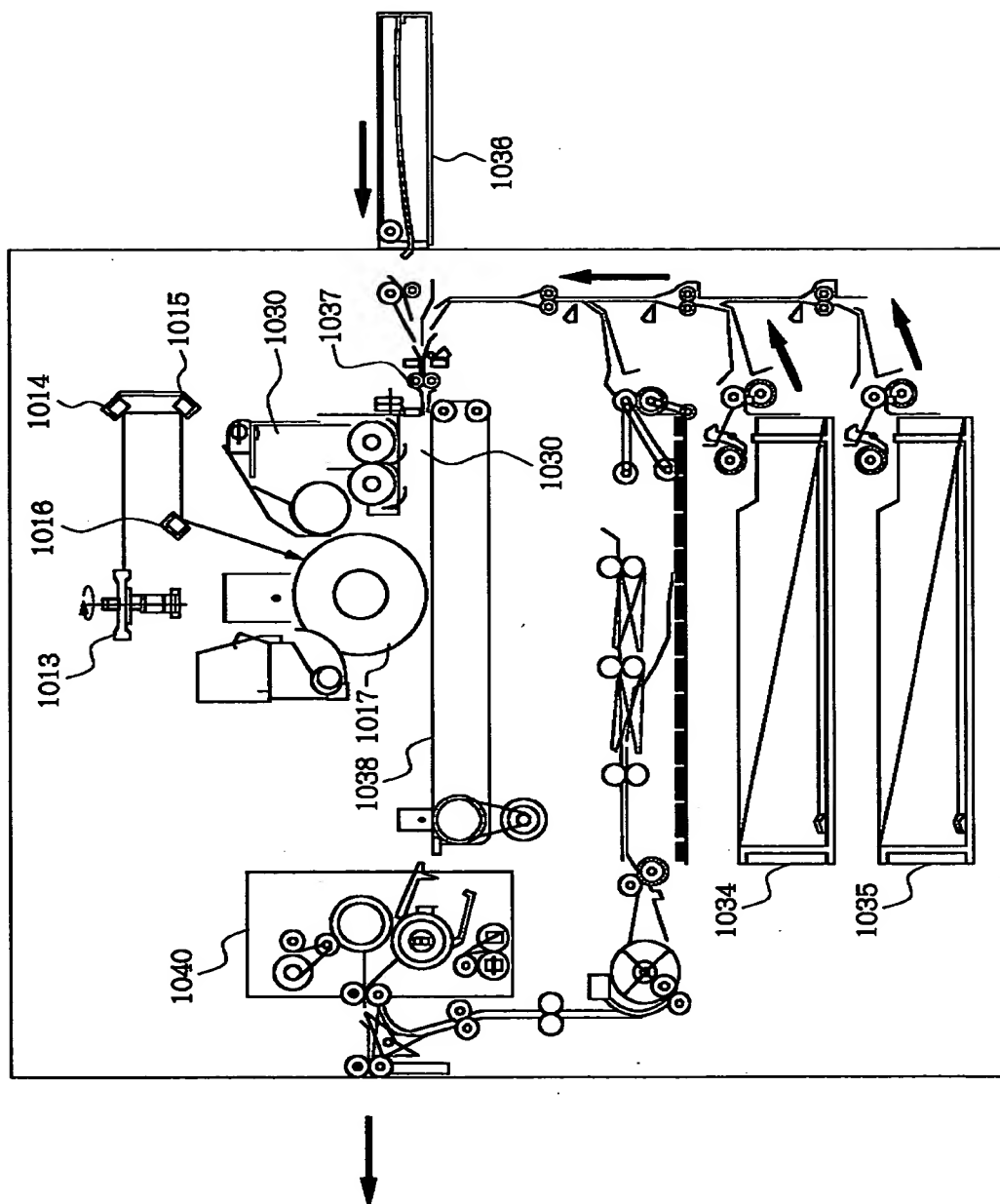
【図8】



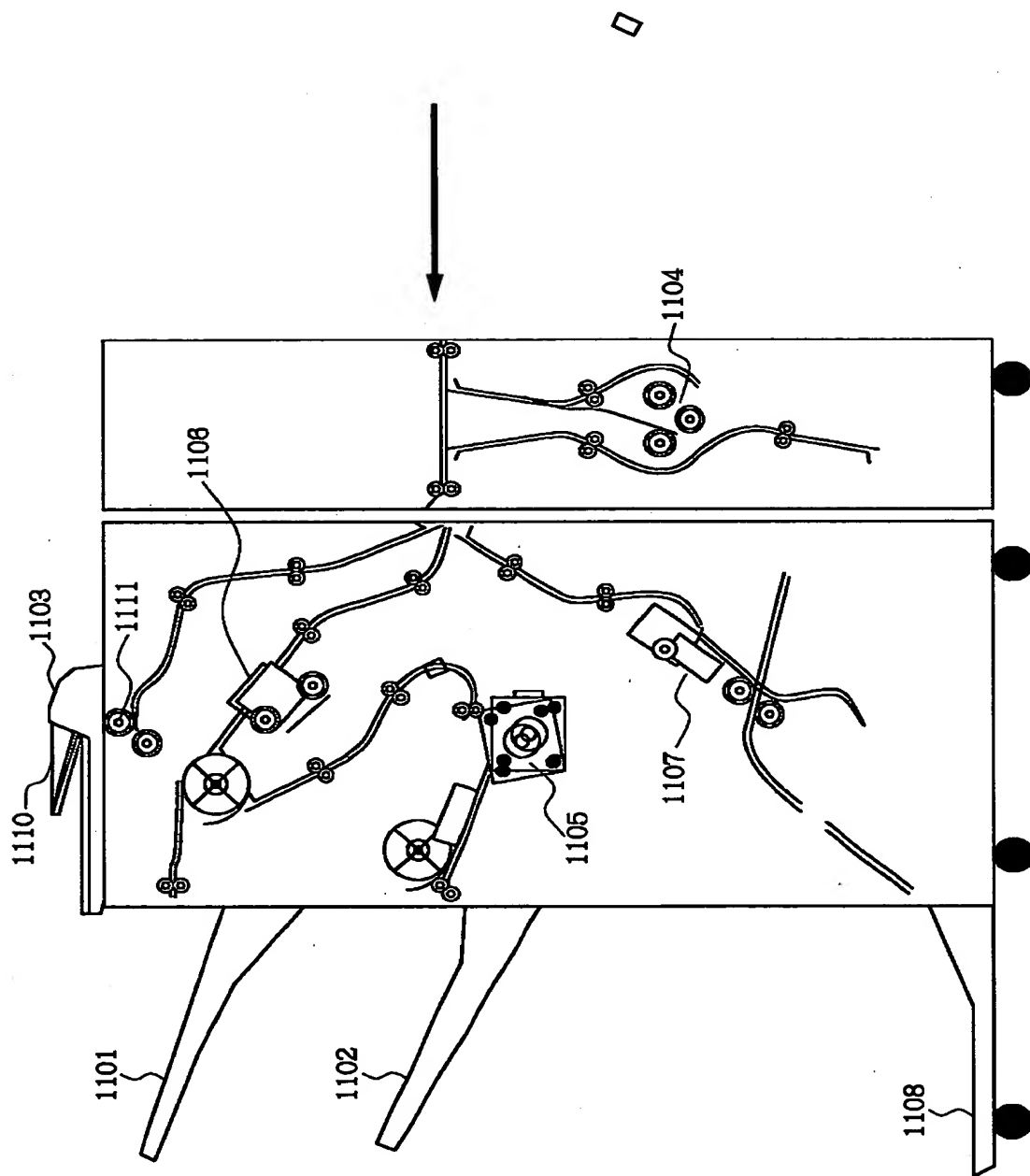
【図 9】



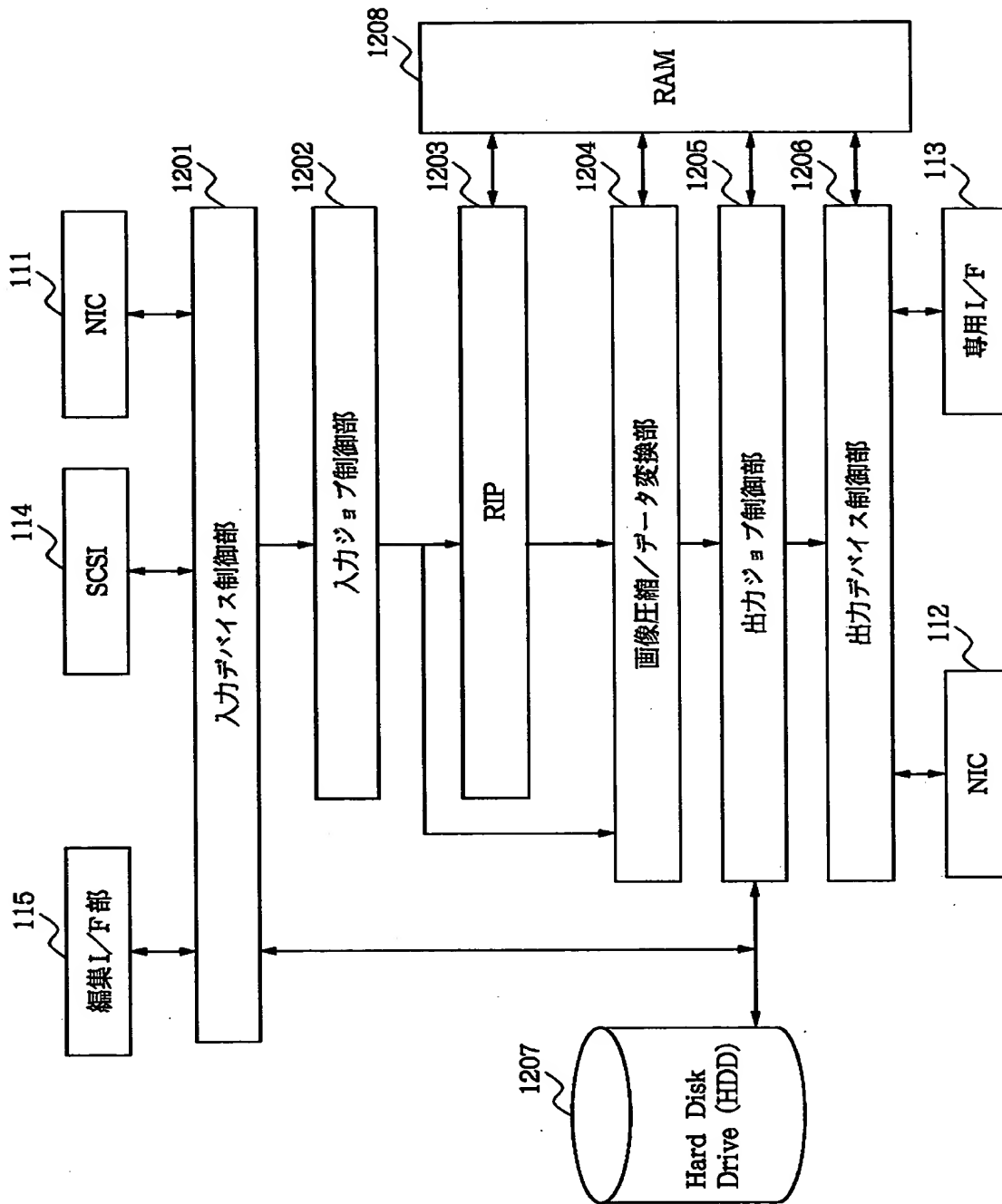
【図 10】



【図 11】

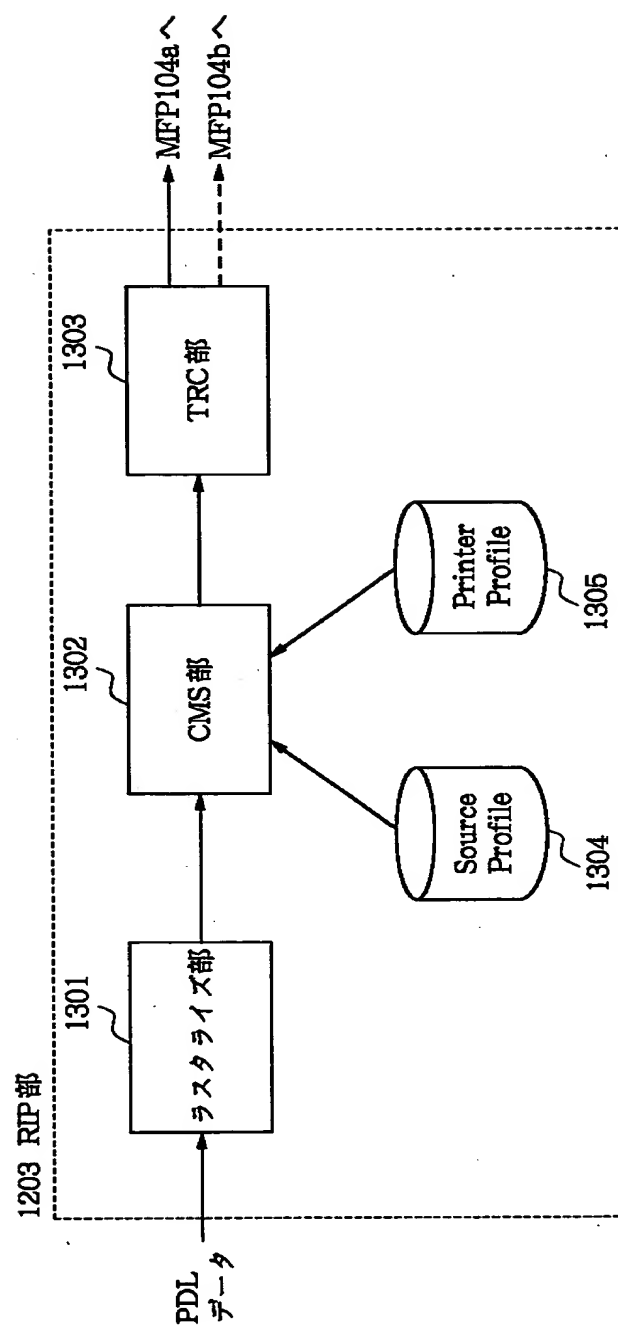


【図 12】

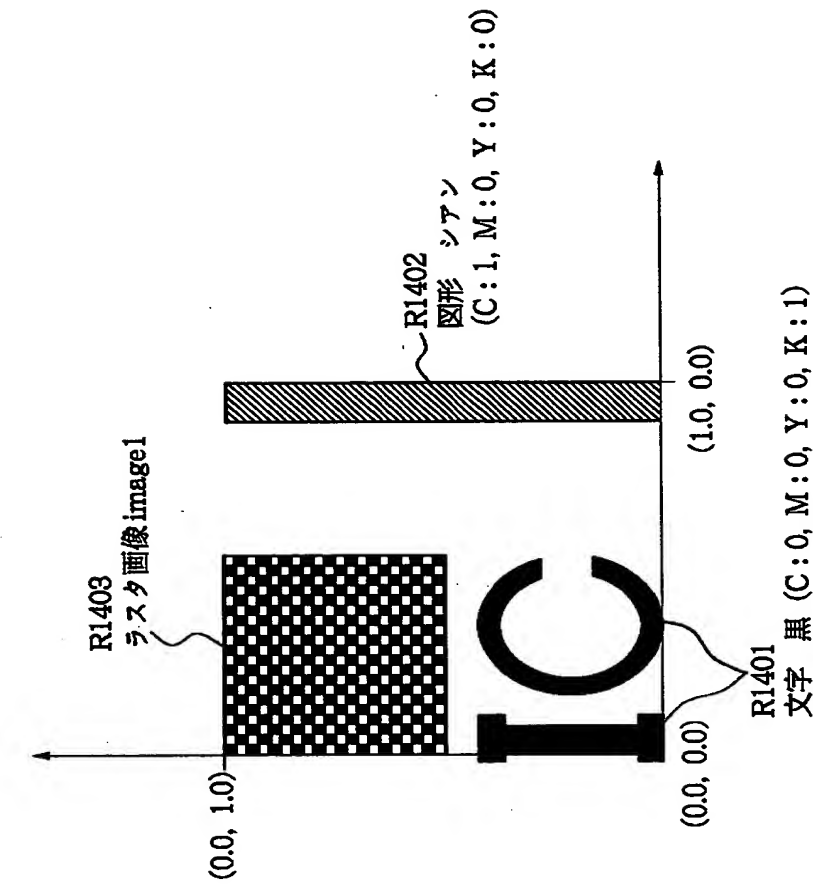




【図13】



【図 14】



```

[R1401 の記述]
char_color = {0.0,0.0,0.0,1.0}; ←L1411
string1 = "IC"; ←L1412
put_char (0.0,0.0,0.3,0.1,string1); ←L1413

[R1402 の記述]
line_color = {1.0,0.0,0.0,0.0}; ←L1421
put_line (0.9,0.0,0.9,1.0,0.1); ←L1422

[R1403 の記述]
image1 = {CMYK,8.5,5,C0,M0,Y0,K0, ←L1431
          C1,M1,Y1,K1,
          .
          .
          .
          C24,M24,Y24,K24};
put_image (0.0,0.5,0.5,0.5,image1); ←L1432
    
```

【図 1 5】

●RGB用ソースプロファイルを用いた数列式

$$\begin{pmatrix} L^* \\ a^* \\ b^* \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_{00} & a_{01} & a_{02} \\ a_{10} & a_{11} & a_{12} \\ a_{20} & a_{21} & a_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} R \\ G \\ B \end{pmatrix} \dots\dots (E1501)$$

●CMYK用ソースプロファイルを用いた数列式

$$\begin{pmatrix} L^* \\ a^* \\ b^* \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_{00} & b_{01} & b_{02} & b_{03} \\ b_{10} & b_{11} & b_{12} & b_{13} \\ b_{20} & b_{21} & b_{22} & b_{23} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} C \\ M \\ Y \\ K \end{pmatrix} \dots\dots (E1502)$$

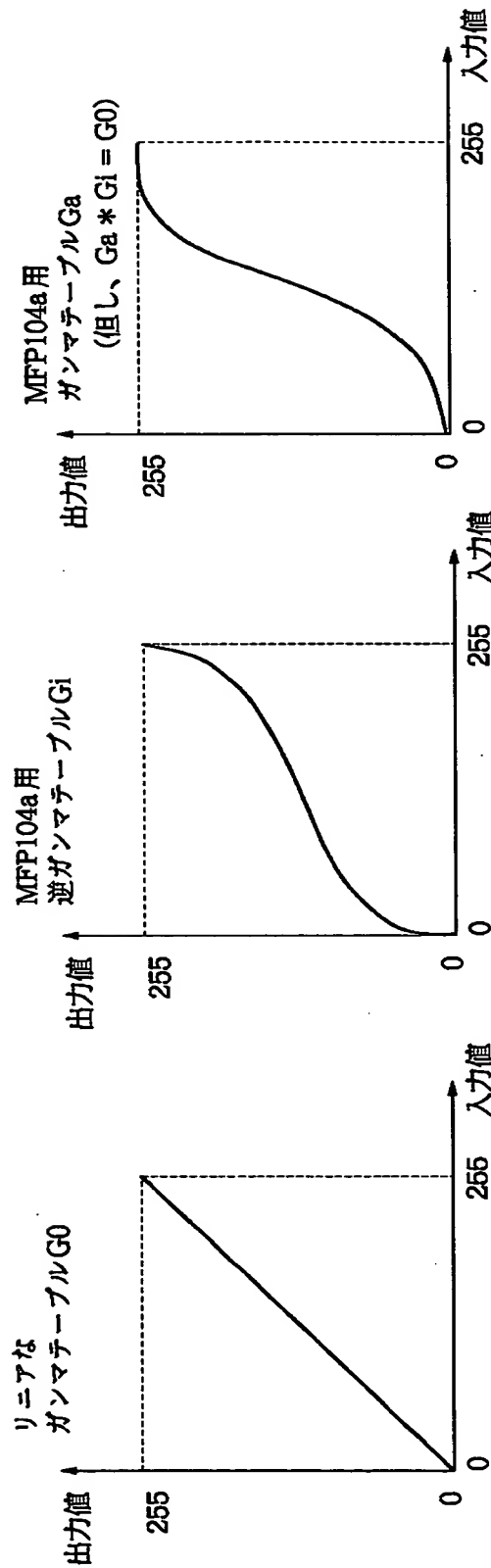
●MFP104a用プロファイルPaを用いた数列式

$$\begin{pmatrix} C \\ M \\ Y \\ K \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} c_{00} & c_{01} & c_{02} \\ c_{10} & c_{11} & c_{12} \\ c_{20} & c_{21} & c_{22} \\ c_{30} & c_{31} & c_{32} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} L^* \\ a^* \\ b^* \end{pmatrix} \dots\dots (E1503)$$

●MFP104b用プロファイルPbを用いた数列式

$$\begin{pmatrix} C \\ M \\ Y \\ K \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} d_{00} & d_{01} & d_{02} \\ d_{10} & d_{11} & d_{12} \\ d_{20} & d_{21} & d_{22} \\ d_{30} & d_{31} & d_{32} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} L^* \\ a^* \\ b^* \end{pmatrix} \dots\dots (E1504)$$

【図 16】

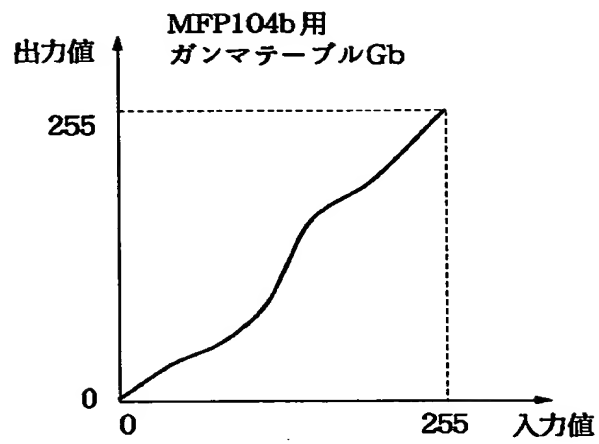


(図 16-3)

(図 16-2)

(図 16-1)

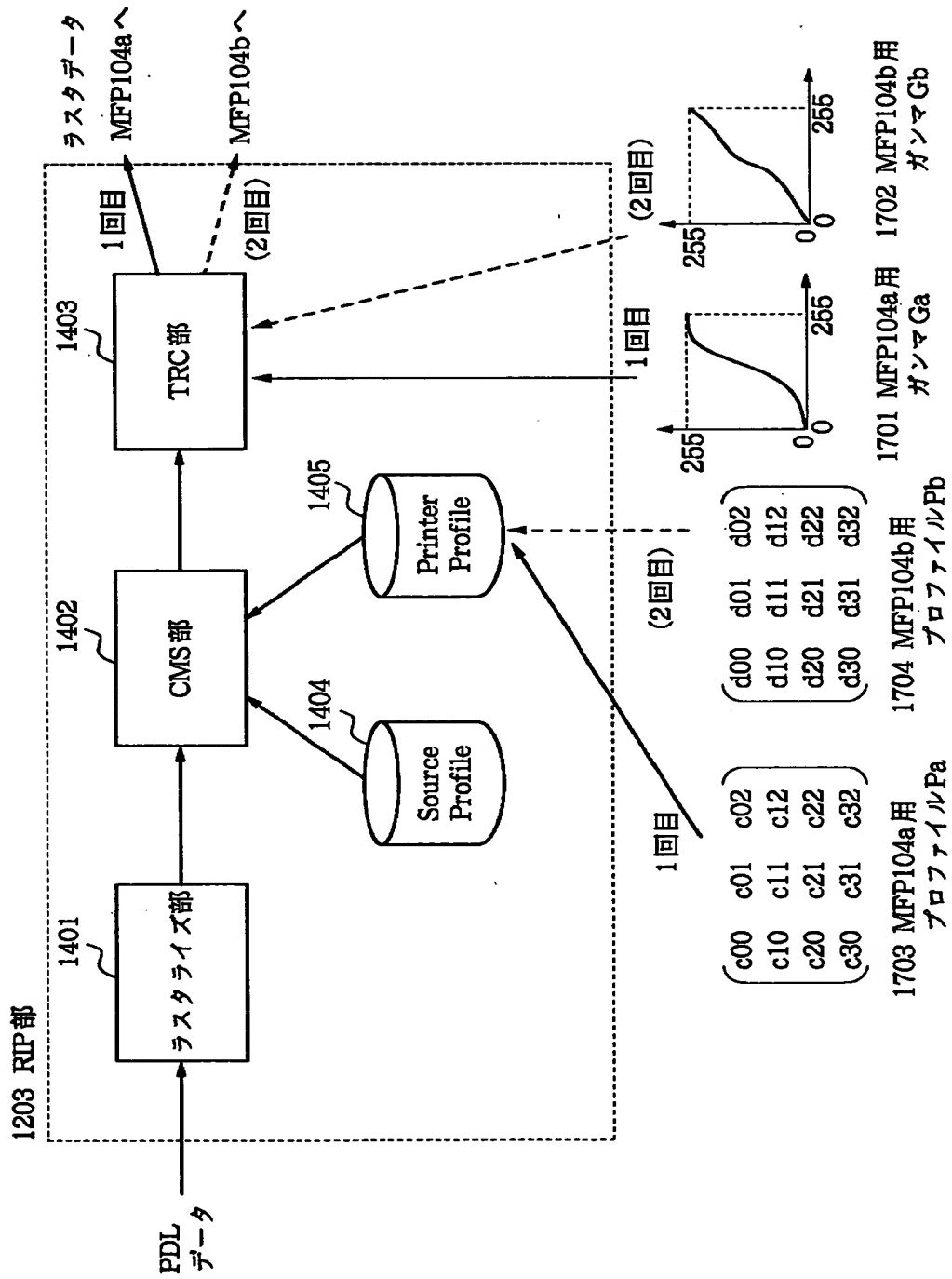
【図 1 7】



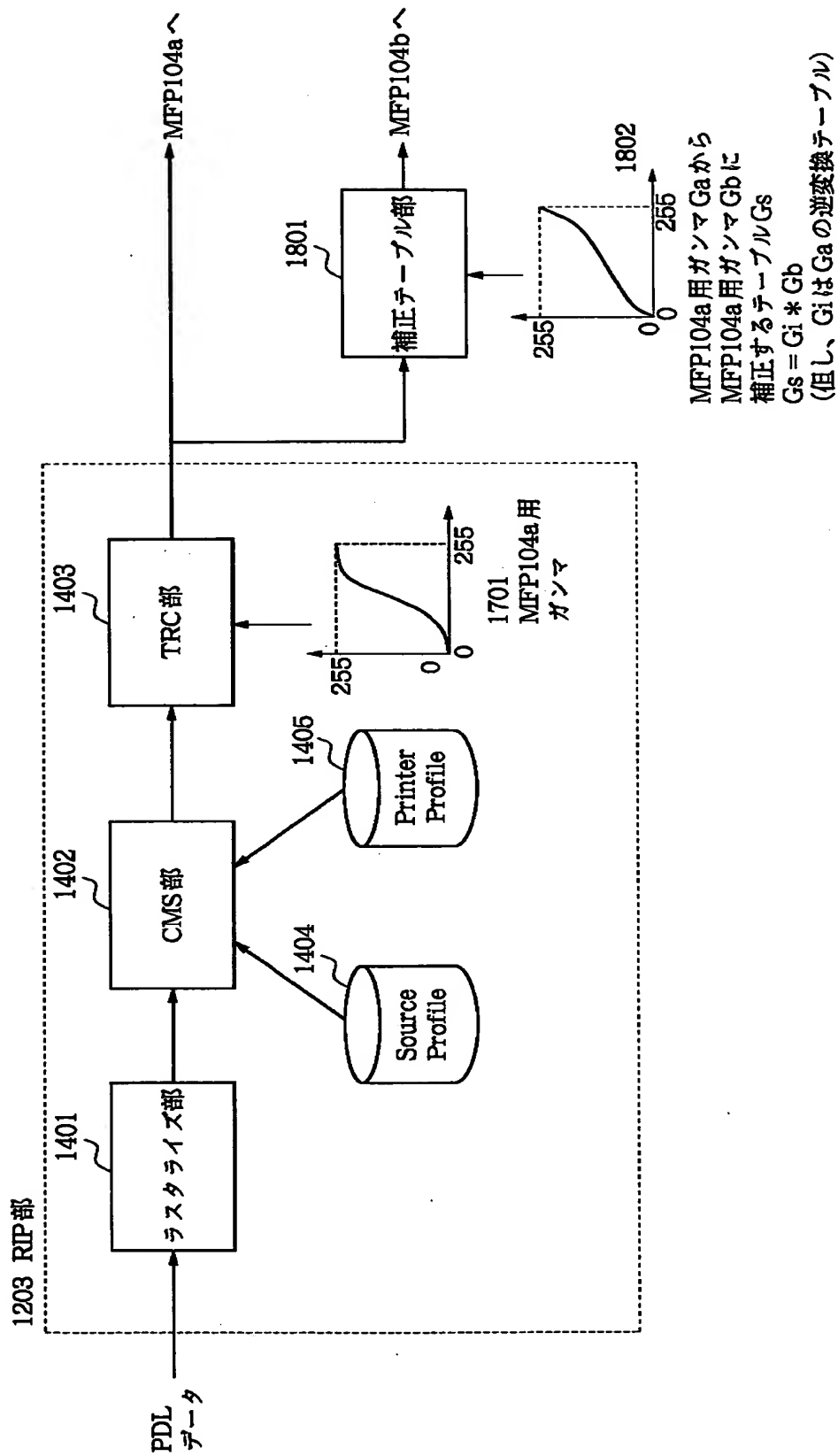
【図 18】

	Cyan	Magenta	Yellow	Black
00H				
10H				
20H				
30H				
40H				
50H				
60H				
70H				
80H				
90H				
A0H				
B0H				
C0H				
D0H				
E0H				
F0H				
FFH				

【図 19】

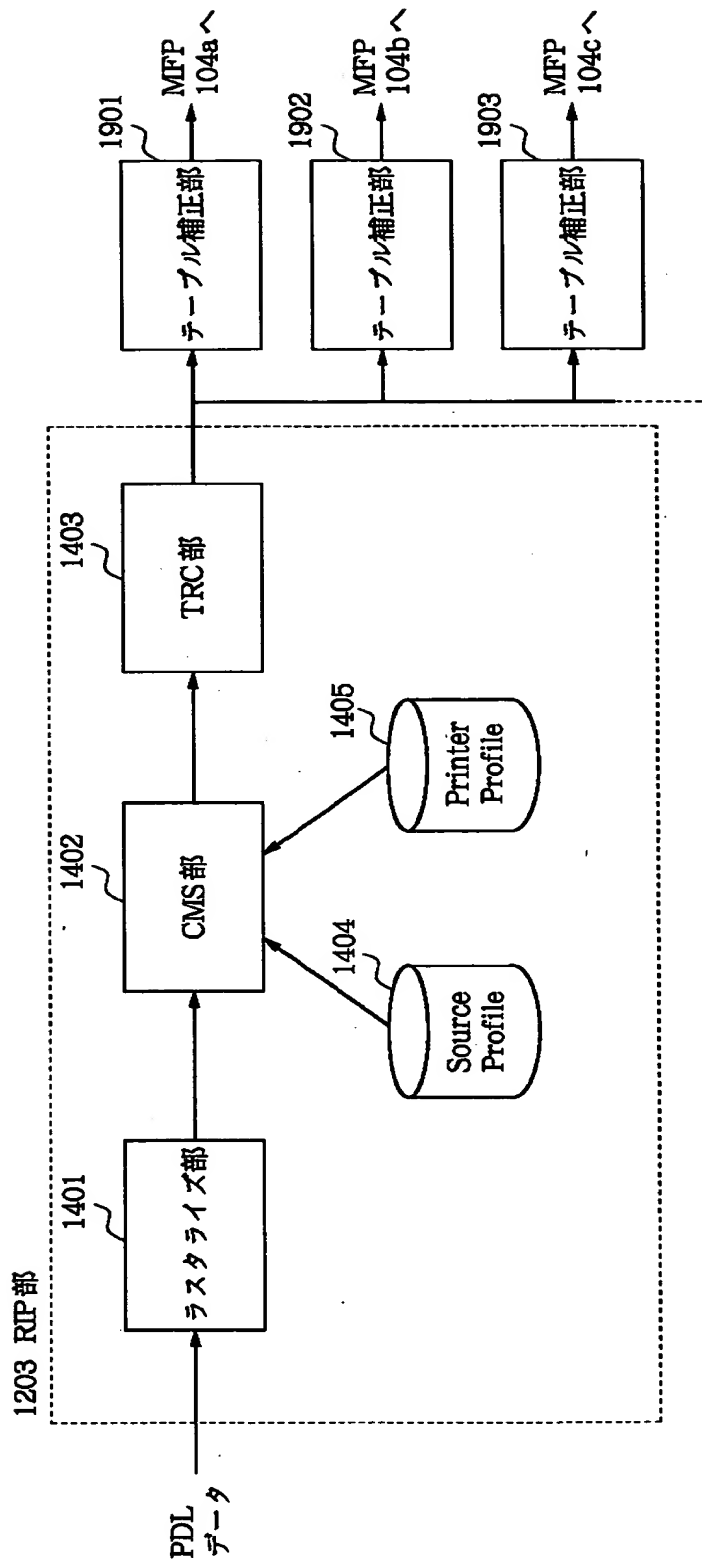


【図 20】

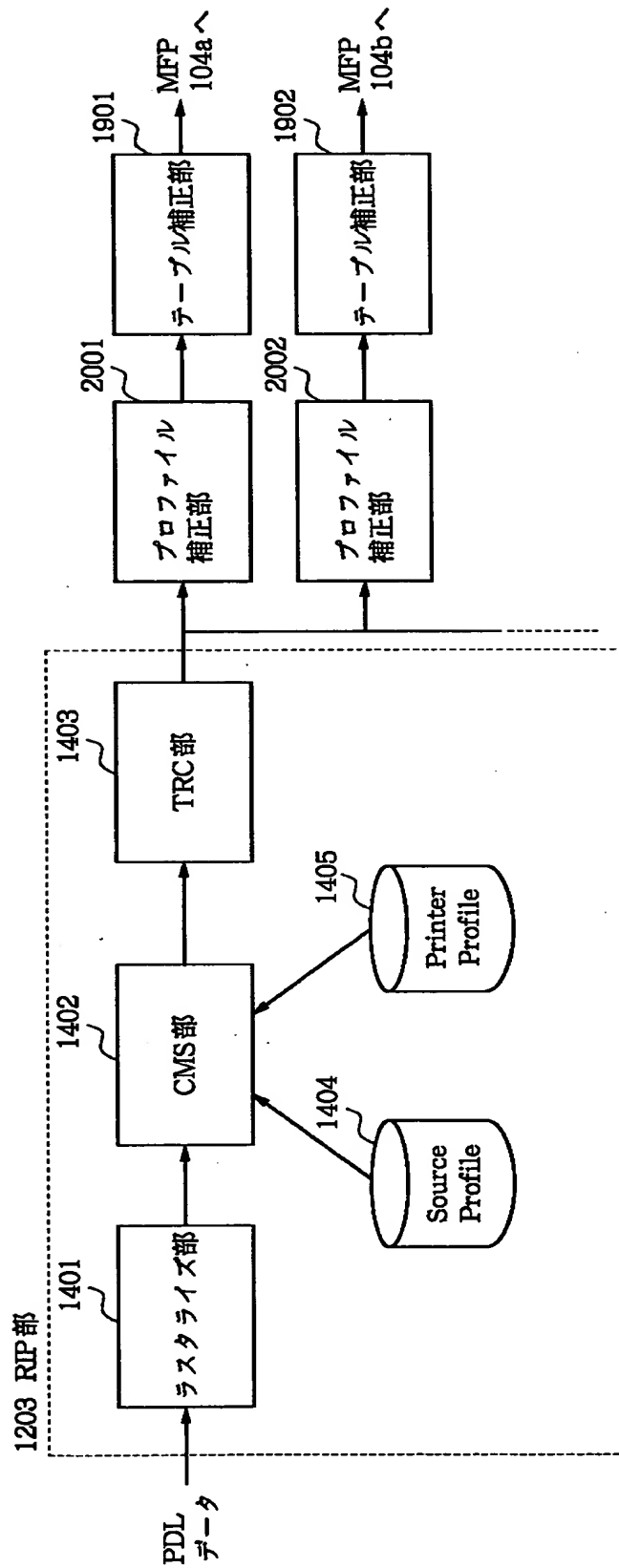




【図 21】



【図 22】



【図 2 3】

●プロフィール補正部の数列式を用いた場合の例

$$\begin{pmatrix} C \\ M \\ Y \\ K \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} e00 & e01 & e02 & e03 \\ e10 & e11 & e12 & e13 \\ e20 & e21 & e22 & e23 \\ e30 & e31 & e32 & e33 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} C0 \\ M0 \\ Y0 \\ K0 \end{pmatrix} \dots\dots (E2003)$$

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 入力画像情報をビットマップ画像データに展開する処理（RIP処理）の回数を抑制し、高速に複数のカラー画像出力装置で並列処理できるようにすることを目的とする。

【解決手段】 入力されたジョブを複数のカラー画像出力装置で並列処理するための画像処理方法であって、入力画像情報を第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに展開する展開工程と、前記第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを第2のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データに変換する変換工程とを有し、前記展開工程で展開された前記第1のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第1のカラー画像出力装置に転送し、前記変換工程で変換された前記第2のカラー画像出力装置用のビットマップ画像データを該第2のカラー画像出力装置に転送する。

【選択図】 図 2 0

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000001007]

1. 変更年月日 1990年 8月30日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都大田区下丸子3丁目30番2号

氏 名 キヤノン株式会社